光栄ある水のバプテスマ

藤田　寛之

予め述べておくと，標題の言葉は庄司淺水のものである。関東大震災前，本郷の東京帝大の美学教室で，当直の小使いが二階の部屋を掃除した際に水道の水を使用し，掃除が終わってからも水を出し放しにしたまま放置したばかりに，そこにあった書物群に被害を及ぼしてしまったという話を引き合いに出して，氏が皮肉と諦観を漂わせるように言い放った印象ある一言である。

さて，災害には，地震，洪水等の自然災害と，工場災害のような人為的な災害がある。今回図書館を苦しめた災害の原因は，水道管の劣化破裂という突発的かつ人為的な事故であり，そこで圧倒的な被害を本や地図，掛図などに被ったのである。洪水や暴風雨による風水害ではないとはいえ，その被害は甚大であった。かのウィリアム・ブレイズは次のように言った。

「書物にとってもっとも恐るべき敵として，「火」の次に数えられるのは（液体，気体
いずれの形であれ）「水」である。」

図書館という文化施設は，史的財産が失われることでその大きな意義を無に帰すると思う。それゆえ近年になって，あらゆる文化資源をいかにして災害から守るか，という問題提起が活発的に出て来ているように，図書館においても，資料を収集して保存，保管するという従来の機能を果たすだけでなく，文化を守るために為すべきことという意識の下で，財産を「防ぐ」という技術が大いに問われ出している。たとえば S.A.Buchanan は図書館や文書館等の文化保存施設が災害対処における計画を立案し，予防，防護，対処，普及という 4 つの側面から災害対策を講じるような，災害に対処する設備を備える必要性を促している。ただしこうしたマニュアル化が，いまどれだけの文化施設で，実践に効果的な段階まで行われているのであろうか。また，たとえこうしたマニュアル化を想定するだけで，人は急に降りかかった困難な災害をいかように防ぎ，文化資源を保護する事ができようか。

私が事故当日目にした図書館地下の書庫は，いつも以上にヒンヤリじめじめとしていて，階上からの水漏れ音が，どこかの鍾乳洞にいるような感じを思い浮かべさせた。階下まで降りると，足首まで水が浸かってしまうぐらい歩くことが困難であった。いつもうるさいエレベーターの中では，滴る水の音が蠢きたつことでさらに騒がしさを増し，大きな水筒の中を不安定な乗り物が上下しているような感じがした。

災害事故の経験を少しも持たなかった私が今回の水害事故に遭遇してしまった時，まずはこの突発的状況を把握すること，ただそのことが頭を占有してしまい，実践的であるべきはずの図書館員像は恥ずかしくもどこかへと行ってしまった。ただ後になって頭に残ったことは，何を守り，何を防ぐかということを見つける事をもっとすべきであったという悔恨であった。もちろん，今後もっと大きな災害が降りかかり，今回以上に緊迫した状況が生じた時，またもや事後になって悔いるかもしれないが，しかし今回の災害は私にとってのバプテスマであっただろう。

再び庄司淺水の重みある一文を引いておこう。

「ある図書館で，多年，破れた窓が修繕されずそのままであったため，そこから蔓がはいりこみ，雨の降るたびに，雨水が蔓をつたわり，書架の本がすっかり台なしになったという話しがある。これなどは，『雨水』を書物の敵とするよりは，むしろ，人間の『なおざり』をあげるべきかもしれない。」（「書物の敵 / 定本庄司淺水著作集 3」）

（ふじた　ひろゆき，人間・環境学研究科総合人間学部図書館閲覧掛）